# 鵜沼西町古墳

編集　各務原市埋蔵文化財調査センター
発行　各務原市教育委員会
TEL（0583）83-1123
平成15年3月7日

鵜沼西町古墳全景　航空写真（南より）

平成12年、各務原市鵜沼西町において１基の古墳が発掘調査されました。発掘調査前の段階では、周辺に円墳の群集墳である西町古墳群（６～７世紀）が確認されていたため、これに含まれる円墳の一つであると考えていました。しかし調査を行った結果、各務原市内では初めての発見となる、古墳時代の終わり頃（７世紀前半）に築造された大型の方墳であることが分かり、新たに「鵜沼西町古墳」と名付けました。

各務原市の中央部から南部にかけては、各務原台地と呼ばれる台地面が広がっています。台地の北東部はその昔、木曽川の浸食作用によって南側を大きく弧状に削り取られており、東へ半島状に細長く突出した地形になっています。鵜沼西町古墳はこの台地突出部の南斜面に造られていました。大河川木曽川を南に臨む、大変見晴らしの良い場所です。交通の要所であった木曽川を掌握した豪族が、その木曽川を見下ろすような場所に古墳を築造していた様子がうかがえます。

美濃においては、６世紀後葉～７世紀前葉に最後の前方後円墳が造られています。そしてその後は、代わって鵜沼西町古墳のような大型の方墳が出現しました。６世紀から７世紀にかけて社会に大きな変化が起こり、それまでの前方後円墳を築造していた豪族とは、異なった政治的基盤を有する豪族が台頭してきたと考えられるのではないでしょうか。

## 墳　丘

鵜沼西町古墳は、北から南へと下降する斜面から張り出した台地上に所在し、自然地形を大変上手く利用して造られていました。

墳丘は方形を呈し、北側を除いて外護列石と呼ばれる石積みを上下二段にめぐらせていました。上段一辺が約15m、下段一辺が約20mに及ぶ大型の方墳です。古墳北側には極めて堅い地山が地表付近に露出しているため、この地山に周濠を掘り込むことによって、墳丘を方形に整形できます。従って、古墳北側においては外護列石を省略したと考えられます。

古墳全景　航空写真（真上より）

外護列石は一つ一つ傾斜を持たせて積んでいますが、上段外護列石は途中で傾斜角度が緩やかに変化していました。この傾斜角度の変化は石材の変化にも対応し、下位では大きめの砂岩、上位では小振りのチャートとなっています。そして下位の部分のみが石室前庭部に連結していました。この上位と下位の差は、作業工程上の構築単位と想定できます。

古墳の築造方法については、まず、周濠あるいは下段外護列石によって墳丘の平面形を方形に整えます。次にその上に、上段外護列石と石室を同時に構築したのではないかと考えられます。その際、古墳は斜面に造られているため、斜面下方に土を盛り、石室構築のために水平面を造り出す必要がありました。上段外護列石は、こうして盛られた土が崩れるのを防ぐ役目も担っていたと考えられます。そのため斜面下方ほど高くなり、墳丘前面が高さ約1m50cmと最も大規模に積まれていました。

古墳を南より見る

周濠内からは、甕や横瓶、蓋坏など、様々な器種の須恵器が数多く出土しました。その位置は、大きく三箇所にまとまって検出され、さらに同一層位中（下層）に集中していたため、自然に流れ込んだものではなく、人の手によって大きく三箇所にまとめて遺棄された可能性が考えられます。これらの須恵器は7世紀代～8世紀代と幅広い時期幅を有していますが、8世紀代のものは極端に少なく、その中心は7世紀代でした。周濠内は古墳に伴う何らかの祭祀を行う場所として、7世紀代を通じて利用され続けたのでしょう。

古墳北側の周濠内　須恵器出土状況（東より）

## 石　室

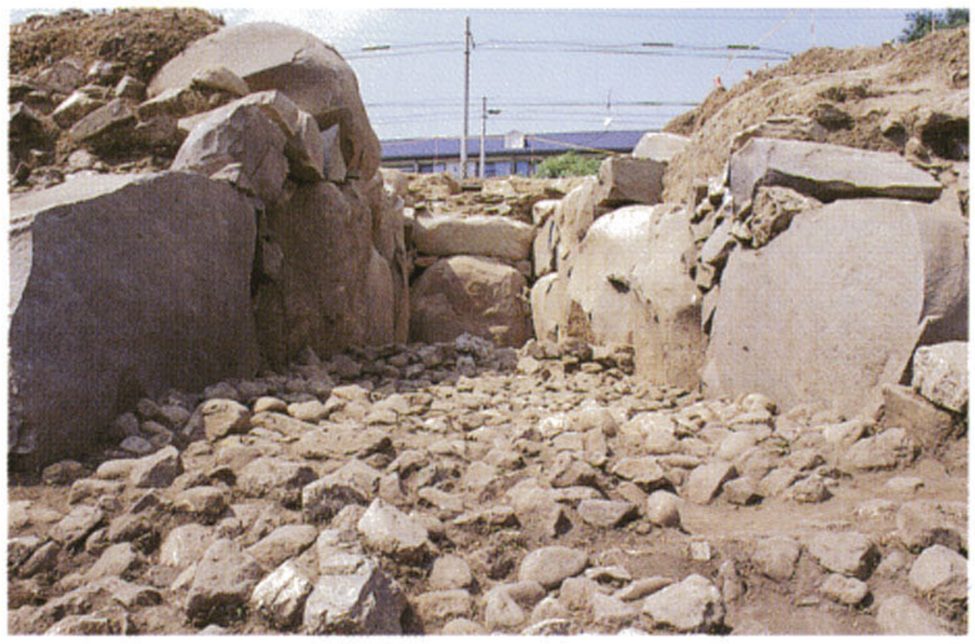
石室は、全長11.1ｍを測る両袖式の横穴式石室（玄室幅が玄門から羨道にかけての幅よりも左右均等に広がる横穴式石室）でした。大変大きな砂岩を用い、奥壁付近で床から天井までの高さは約2.76ｍに及びます。天井に架けられていた石は、残念ながら後世に抜き取られ、残っていませんでした。

横穴式石室は横に細長い部屋を造り上げるのですが、部屋の一方には外へと通じる出入口が設けてあります。出入口は扉の変わりに、閉塞石と呼ばれる石を床から天井まで積んで密閉し、この石をはずしたり積んだりして石室内へと出入りしていたようです。鵜沼西町古墳においても、前庭部全体にチャートや砂岩の閉塞石が確認でき、最も高く積まれている箇所で約70cmを測りました。

石室の床には石が敷き詰められていました。そして、遺体を安置する玄室と通路である羨道の境、および羨道と石室入り口である前庭部の境には、周囲よりも大きな石を横一列に配して境としています。羨道と前庭部の境はより明確に区画されており、前庭部の床は玄室～羨道よりも20cm程低くなっていました。

石室内からは、土師器の甕や、須恵器の甕、蓋坏などが出土しました。すべての遺物の年代は７世紀前半であることから、古墳はこの時期に築造されたものと推測できます。前庭部閉塞石の下からは須恵器の破片がまとまって数多く出土し、接合した結果、大変大きな甕になりました。前庭部は前述したように床が玄室～羨道よりも一段低く、意識的に構築されていることと考え合わせると、何らかの祭祀を行っていた可能性が考えられます。

石室　閉塞石が積まれた状態（南より）



石室　閉塞石を除去した状態（南より）

石室および周濠内から出土した須恵器

## 中世における古墳の再利用

石室内からは山茶碗や土師皿、常滑の壺など、中世の遺物も数多く出土しています。そうした遺物の周囲からは骨片や焼土も検出されました。さらに羨道の西側壁では石材の隙間に、割れてはいたものの完形の山茶碗が伏せた状態で見つかっています。このように中世において石室内を盛んに再利用していたと考えられ、石室内は古墳築造当時の状態が保たれていなかったのでしょう。

石室内から出土した中世遺物

古墳周濠の西部南端では、周濠を東西に削平して構築された建物跡が確認できました。北側の斜面上方を掘り込んで南側の斜面下方へ盛土をし、床を平地に整えていたと考えられます。柱穴は、北側の壁に沿って4基検出されました。この建物跡付近においても、中世の遺物が出土しています

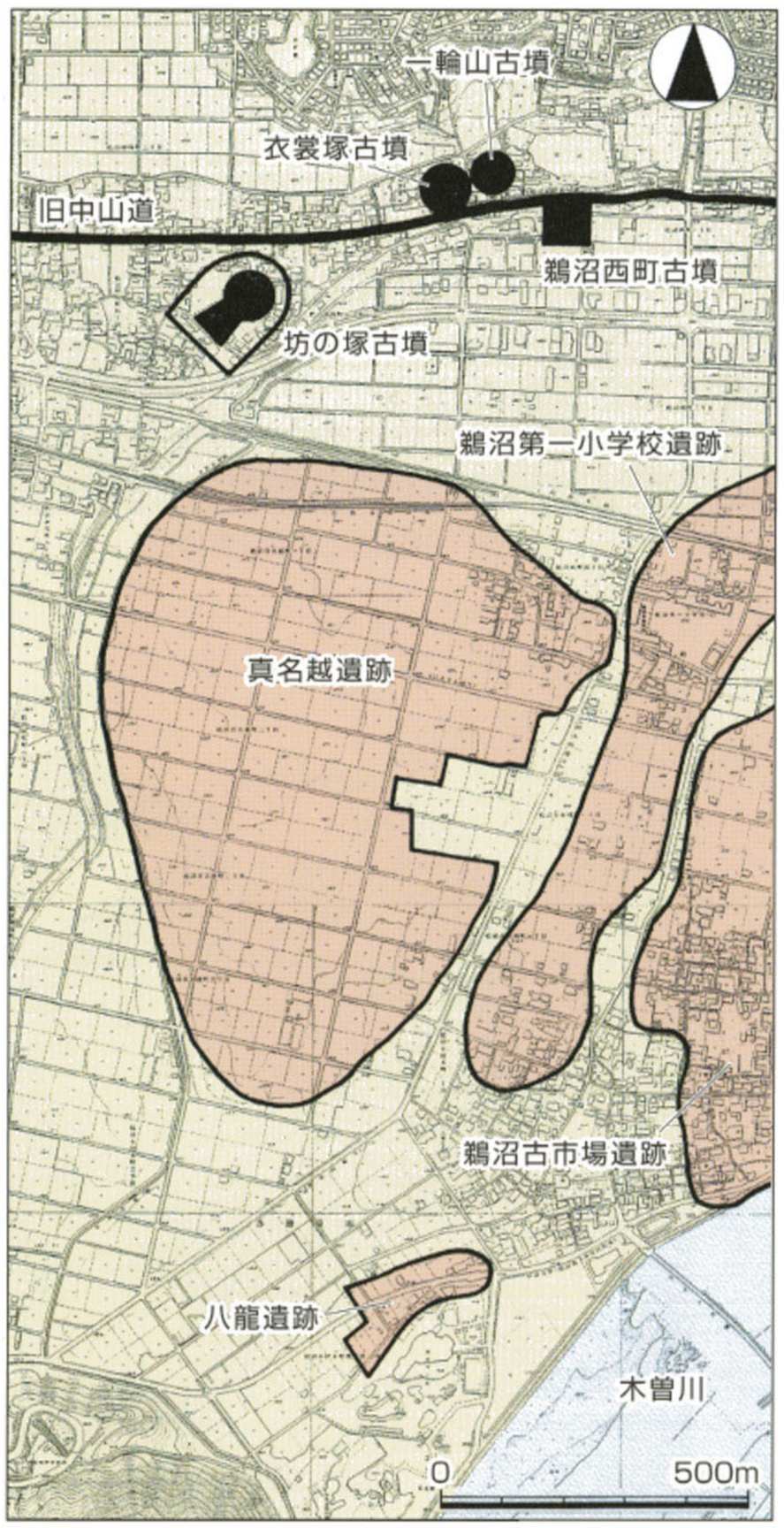
石室内や建物跡付近で出土した中世の遺物は、12世紀終わり頃～13世紀前半(鎌倉時代)のものが中心となっていました。この時期を中心に石室内を再利用し、さらに古墳周濠を削平して建物を構築したと考えられます。

建物跡(東より)

## まとめ

各務原市鵜沼地区に広がる各務原台地は、高低差のある二つの面を形成しています。台地上位面には一輪山古墳、衣裳塚古墳、坊の塚古墳など、市内でも有数の前・中期古墳、そして終末期の鵜沼西町古墳が築造されています。その南側の台地下位面には、古墳時代に集落があったと考えられる遺跡(真名越遺跡・鵜沼第一小学校遺跡・八龍遺跡・鵜沼古市場遺跡)が所在しています。

鵜沼地区は、交通要所である木曽川沿岸という立地に加えて、古代では東山道、中世では鎌倉街道、そして近世では旧中山道と、経済的・政治的に大変重要な街道が東西に横断し、大いに賑わっていました。今後は、古墳だけではなくその周囲に広がる集落も含めた面的な広がりを追求することによって、古代各務原の歴史が解明されることが期待されます。




周辺遺跡分布図